

顕現後第三主日（1月21日の聖書箇所）

I 第一朗読（エレミヤ3章21節―4章2節）

- 21 裸の山々に声が聞こえる
イスラエルの子らの嘆き訴える声が。
彼らはその道を曲げ
主なる神を忘れたからだ。
22 「背信の子らよ、立ち帰れ。
わたしは背いたお前たちをいやす。」
「我々はあなたのもとに参ります。
あなたこそ我々の主なる神です。
23 まことに、どの丘の祭りも
山々での騒ぎも偽りにすぎません。
まことに、我々の主なる神に
イスラエルの救いがあるのです。
24 我々の若いときから
恥ずべきバアルが食い尽くしてきました
先祖たちが労して得たものを
その羊、牛、息子、娘らを。
25 我々は恥の中に横たわり
辱めに覆われています。
我々は主なる神に罪を犯しました。
我々も、先祖も
若いときから今日に至るまで
主なる神の御声に聞き従いませんでした。」
1 「立ち帰れ、イスラエルよ」と
主は言われる。
「わたしのもとに立ち帰れ。
呪うべきものをわたしの前から捨て去れ。
そうすれば、再び迷い出ることはない。」
2 もし、あなたが真実と公平と正義をもって
「主は生きておられる」と誓うなら
諸国の民は、あなたを通して祝福を受け
あなたを誇りとする。

II 第二朗読（コリントの信徒への手紙Iの7章17―23節）

- 17 おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のまま歩みなさい。これは、すべての教会でわたしが命じていることです。
18 割礼を受けている者が召されたのなら、割礼の跡を無くそうとしてはいけません。割礼を受けていない者が召されたのなら、割礼を受けようとしてはいけません。19 割礼の有無は問題ではなく、大切なのは神の掟を守ることです。
20 おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。
21 召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。自由の身になることができますとしても、むしろそのままいなさい。22 というのは、主によって召された奴隷は、主によって自由の身にされた者だからです。同様に、主によって召された自由な身分の者は、キリストの奴隷なのです。23 あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。人の奴隷となってはいけません。
(24 兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。)

Ⅲ福音 (マルコ1章14―20節)

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

16 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18 二人はすぐに網を捨てて従った。

19 また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、20 すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

今週の福音の文脈

マコ1―15は福音書全体の序となっていて、ルカやマタイとは違って、イエスの誕生や幼年時代のことには一言も触れず、洗礼者ヨハネの荒野での活動から筆を起している。天上で神がイエスに「あなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう」と述べていたように、荒野に洗礼者ヨハネが現れ、救いが成就する終わりの日に先立つ預言者として、悔い改めの洗礼を宣べ伝え、「私より優れた方が、後から来られる」と宣言していた。イエスがナザレから来て、彼から洗礼を受けると、霊が鳩のように下り、天から声が聞こえた。それから、荒野で四十日間、サタンから誘惑を受けたが、天使が仕えていた。今日の福音の冒頭部となる14―15は序の結びであると同時に、16節以下の導入ともなっている。

今日の福音に続く21―34節では、「カファルナウムの一日」と呼ばれる一日の出来事が述べられる。まず、21―28節では宗教生活の中心である「会堂」で、悪霊につかれた男から悪霊を追い出し、29―31節では個人の「家」で、病に苦しむペトロの姑から熱を退散させ、32―34節では公の場につながる「戸口」で、さまざまな病を癒し悪霊を追い出している。イエスは宗教生活の場から個人生活の場からも公の生活の場からも、人を苦しめる力を追い払っている。この一日はイエスが生涯にわたって果たす役割を凝縮した一日である。

逐語的な訳

14 だが 逮捕されたことの後には ヨハネが、

行った イエスは ガリラヤへ、

宣べ伝えながら 神の福音を、

15 そして 言いながら 次のことを、

「満たされた 時は、 そして 近づいた 神の国が。

悔い改めなさい、 そして 信じなさい 福音を。」

16 そして 沿って行きながら ガリラヤの海に沿って、

彼は見た シモンとシモンの兄弟アンデレが 網を打っているのを 海に。

なぜなら 彼らがあつた 漁師で。

17 そして 言った 彼らに イエスは、

「来なさい 私の後ろに、

そして 私は行方でしょう あなたがたが 人間の漁師になることを。」

18 そして すぐに 捨てて 網を、

彼らは従つた 彼に。

19 そして すこし先に進んで、

彼は見た ゼベダイの子ヤコブと彼の兄弟ヨハネを、
そして 彼らが 舟で網を繕っているのを。
そして すぐに 彼は呼んだ 彼らを。
そして 捨てて 彼らの父ゼベダイを 舟に 雇い人と一緒に、
彼らは出て行った 彼の後ろに。

【第一段落(14―15節)】 14―15節は原文ではひとつながりの文章であり、その主語は「イエスは」であり、述部は「ガリラヤへ行った」である。一行目の「逮捕されたことの後に」によって、イエスがガリラヤへ行くことになるきっかけが述べられ、三行目以下の「宣べ伝えながら」と「言いながら」によって、イエスがガリラヤへ向かう目的やその時の様子が述べられている。

【第二段落(16―20節)】 16―20節はガリラヤ湖をカファルナウムに向けて北上するイエスが、その途上で弟子を召し出す物語である。この物語は16―18節と19―20節の二つの部分に分けられるが、両者は同じ構成を持っている。

- (イ) 場所を移動して行く途中で、
- (ロ) イエスは二組の兄弟が仕事をしているのを「見た」。
- (ハ) そして彼らに声をかけた。
- (ニ) すると、彼らは網や家族や船を「捨てて」、
- (ホ) イエスについて行った。

この召命物語の要点は、「イエスが兄弟を見て、声をかけると、彼らは捨てて、ついて行った」ということになる。この要点から考え、イエスのイニシアチブが強調されているのは明かである。

①構成から使信へ

今日の福音の14―15節では、神の支配の到来を告げるイエスの最初の言葉が語られ、16―20節では、漁師であった四人を弟子として呼び出す物語が描かれる。
宣教をガリラヤで開始(14―15節)

洗礼者ヨハネの逮捕は準備の時代の終焉を告げる出来事であった。この出来事に新しい時代の到来を見て取ったイエスは、それに素早く呼応して、活動の主要舞台となるカファルナウムに向かって北上し、「神の福音」を宣べ伝える。

神の福音とは、神についての福音であると同時に、神が宣べる福音でもある。神はイエスを通して福音を人々に告げ、イエスは神についての福音を人々にもたらす。イザ五二七に次のようにある。

いかに美しいことか
山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。
彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え
救いを告げ
あなたの神は王となられた、と
シオンに向かって呼ばれる。

ここで「あなたの神は王となられた」と訳された表現は、新約聖書の時代に近づく、「神の国」という言い方に替わってゆく。人間をはるかに越える神に、擬人的な表現を使うのは不適切と考えるようになったからだろう。また、「良い知らせを伝える」と訳された語は、新約では「福音を宣べ伝える」という言葉になってゆく。「あなたの神は王となられた」と呼ばわって「良い知らせを伝える」者のように、イエスは神の国についての福音を宣べ伝えながら、ガリラヤ湖の西岸をカファルナウムに向かう。

15節はイエスが宣べ伝える言葉である。「時が満たされた、そして神の国が近づいた」とあるが、「満たされた」も「近づいた」も完了形である。イエスは完了形を用いて、すでに現実となった事実を示してから、「悔い改めなさい、そして福音を信じなさい」と呼びかける。悔い改めることによって時が満ちるのではない。イエスの到来によって時が満たされたから、悔い改めという対応が人々に求められている。

ここで「時」と訳された言葉(カイロス)は、出来事によって知られる「時節」を意味する。春には桜が花を咲かせる。春は桜にとつて開花という時節だからである。春が桜に求める対応は花を咲かせることである。そのように、イエスが運ぶ「時」も時節であつて、それにふさわしい対応を人に求める。その対応が「悔い改めなさい、そして福音を信じなさい」ということである。「悔い改める」とは、生き方の部分的な手直しではなく、神がもたらす新たな事態に全面的に身を合わせることである。イエスを通して神の支配(神の国)が始まるときに、人が取るべき態度は、生きる向きを変えて福音を信じることである。

最初の弟子 (16—20節)

この段落では二組の兄弟の召し出しが16—18節節と19—20節に語られるが、前頁の構成に示したように、この両者はまったく同じ構造を持つている。

(イ) イエスは福音のために神から遣わされた人としてガリラヤ湖に沿って進む。宣教活動の舞台となるカファルナウムを指す彼は、弟子を求めている。

(ロ) イエスが「見る」ことによつて、弟子の召し出しは始まる。「ここで」の「見る」は「選ぶ」にも等しい。

(ハ) 王上一九19—21に、召命物語の原型がある。ここでは、預言者エリヤは自分の外套を投げかけるといふ象徴的な行為によつてエリシヤを召し出ししている。しかしイエスは、ただ呼びかけの言葉によつて弟子たちを召し出す。

(ニ) このイエスの言葉には有無を言わせぬ力がある。その力に引き寄せられた弟子たちは、網や肉親を捨てる。

(ホ) 彼らは重大な決意を表明することもなく、無言のままイエスに従う。彼らに心の準備があつたのではない。彼らはイエスを通して働く力に捕らえられたのである。

この二組の召命物語は召命の本質を語ろうとする理念型であつて、歴史の事実がこのままの経過で起こつたとは限らない。しかし、召命という出来事があれば、見て、呼びかけるイエスが必ず働いている。その働きは心の準備のない者をも引き寄せる。従つて、弟子はあくまでも受動的である。だが、この受動から彼らの積極的な働きかけが生まれ、育まれる。

② 今週の福音のまとめ

救いの「時節」の到来は、網を捨て、肉親を捨てた人々の姿にまざまざと示されている。仕事が無意味なのでも、家庭が無意味なのでもない。大事なそれらを捨てさせるほどの「時節」が到来したのである。この「時節」はこの世をまったく新たな秩序に作り替える救いの時なのである。

③ 「時(カイロス)」

時計を常に身につけている現代人にとつては、時間は刻々と流れ去る時刻であるが、時計を持たない時代の人々にとつては、時は出来事によつて測られる「時節」である。時には節があり、節と節の間には一つの出来事がつまっている。時の流れを人に意識させるのは、節と節の間の、この出来事なのである。

時を表すギリシヤ語は、クロノスとカイロスである。両者の区別がいつも意識されているわけではないが、「二時間・一日・一年」のように、流れ去る時の長さに注目したときには、クロノスが使われ、「試練の時・実りの時・恵みの時」のように、時の節々を満たす出来事に注目したときには、カイロスが使われるのが一般的である。たとえば、ルカ二〇9—10に

ある人がぶどう園を作り、これを農夫たちに貸して長い旅に出た。収穫の時になったので、

ぶどう園の収穫を納めさせるために、僕を農夫たちのところへ送った。

とあるが、「長い旅に出た」を直訳すれば「長いクロノス旅に出た」となる。だが、「収穫の時になったので」は原文ではカイロスの与格形だけであり、この一語がこのように訳されている。「収穫の」を補ったことから分かるように、このカイロスは収穫という出来事によって規定される「時節」である。収穫という時節であるから、主人は僕を送って、収穫物を集めようとしたのである。

カイロスは新約聖書で88回使われる。ごく一般的には、人が何らかの行動を起こす時点(マタ一25)、行動を取るにふさわしい時機や機会(マタ二四45)、何らかの事件が起きる時などを表す(使七20)。また、その時節を特徴づける出来事を示す語句を伴うことも多い。たとえば、育つがままに放っておかれた毒麦も「刈り入れの時」には焼くために束ねられ(マタ一三9)、信仰が根づいていない者は「試練の時」が来ると信仰を捨ててしまうが(ルカ八13b)、戦いを立派に戦い抜き、信仰を守り抜いたパウロは、「世を去る時」が義の栄冠を受ける時だと考えている(2テモ四6)。

このような用法は新約聖書以外の文書にも見いだされるが、新約聖書に特徴的な用法は、神が行動する時を示すカイロスである。それは、主のもとから訪れる慰めの「時」であり(使三20)、恵みの「時」であるが(2コリ六2)、神の福音に従わない者にとっては裁きの「時」である(1ペト四17)。なぜなら、今や決定的な「時」が間近に迫っているからである(ルカ二一8)。イエスに出会った悪霊はまだ「その時」ではないと抗議して、彼らの支配を継続しようとするが(マタ八29)、「定められた時」は迫っているから、妻のある人はない人のように、世の事にかかわっている人はかわりのない人のようにすべきである(1コリ七29)。空模様を見分けることは知っているのに、「時代」のしるしを見ることができない人のもようであってはならない(マタ一六3)。

今週の福音の15節に「時は満たされた。そして神の国が近づいた」とあるが、この「時」も神が救いを完成させる「終末の時」を意味している。洗礼者ヨハネの逮捕は、準備の時代から完成の時代への節目となる出来事である。時(カイロス)は満ち、新たな時節が到来した。イエスが行うさまざまな活動は、神の支配が隔々にまで及ぶ「終末の時」の到来を示すしるしである。だから、悪霊の追放にせよ、病人のいやしにせよ、イエスの活動は神の国の到来を告げる出来事である(マタ一5、ルカ一一20)。

今週の福音の後半部16―20節節では、ガリラヤ宣教へと向かうイエスが、最初の弟子たちを呼び寄せる召命の物語が語られる。ここで強調されているのは、有無を言わずに弟子たちを招くイエスの力強さである。網や父を捨てさせるのは、彼らの決断というよりは、イエスの呼びかけを通して働く「時」の力である。

今週の福音は時節の到来を告げる14―15節と弟子の召命を語る16―20節とをひとつに合わせている。無関係とも見える二つのエピソードだが、両者は密接に結び付いている。弟子たちをイエスに従わせた力は、イエスの人間的な魅力というよりは、イエスが運ぶ「時節」にある。神が定めた救いの「時節(カイロス)」に込められた力が、イエスの言葉を通して、四人に働き、「網や父」に象徴される古い生き方から、イエスに従う新しい生き方へと導く。この意味で、15節のカイロスは、救いの業を行う「神の時」であると同時に、新たな命を神から受けて生きる「人間の時」でもある。カイロスは終末の時として、いわば「神と人との出会いの時」なのである。

